

質の高い製造力を生み出すために

研究開発部長 矢口 哲郎

新春の朝日新聞に「グローバル化 日本の進むべき道は」と題して、歴史研究の視点で経済を読み解く東大大学院教授高山博氏とグローバルリーダーの育成を実践しているベルリッツ・インターナショナル最高経営責任者内永ゆか子氏との対談が掲載された。日本の課題として両者が指摘したのが教育の問題であった。特に中国など新興国の追い上げの激しい製造業において、今の水準を維持するには、「国際競争力のある人材を育成するしかない。厳しい教育を行い質の高い労働力を生み出す。それが日本の最優先の課題だ」と高山氏が述べている。しかし、製造業の現場で働く人々の教育に長年取り組んできたものとしては、この「厳しい教育を行い、質の高い労働力を生み出す」という考えには首をかしげる。

教育が最大の課題であるということについては、思いは同じである。しかし必要なのは、教育の「厳しさ」ではなく「質の転換」であると考え。従来の教育概念から脱した、仕事の中身と有機的に関連させた、新しい学習とそのあり方が必要であると考えるのである。

いま日本で求められているのは、他にない物、作れない物を、他にない方法で、いかに早く高い品質で作るかという『創造的製造力』である。そのために必要なのは、答の見えない中、目標を高く持って探究的に仕事をする、意欲のある人材の育成であろう。それは、これまで行われてきたような、「知識・技術を与え、覚えさせる受動的な学習」では成り立たないのである。

新しい教育(学習)のあり方のヒントは、実際の製造現場で働いている本当のベテランといわれる人々の行動の中にある。彼らは現場のさまざまな状況を読み取る力があり、その読み取った内容に応じて行動を生み出している。また、その経験の積み重ねを整理することによって、現場の課題を解決している。彼らの仕事への自信と意欲は、そうしたいくつもの課題を突破してきた経験からつくりだされているのである。

私どもは、そうしたベテランの行動や意欲の成立過程から、新しい学習は、あくまで現場に即した課題を解決するという場で、具体的な対象を教材として、自分で調べ実験するという学習でなければならないと考える。探究的姿勢を育て、仕事への自信・意欲を生み出すには、現実的な課題にぶつかって自分で突破していくという経験が不可欠だと考えるのである。

ささやかながら、私どもはいくつかの企業にそうした学習を提案し、その実現を支援してきた。その過程で、製造の現場で故障が目に見えて減り品質が格段に上がる、製造する人々の姿勢が変わってくる。技術の高度化にも対応できるようになり工夫も生み出される、という事実をいくつも見てきた。

国際競争力のある労働力、質の高い製造力を育てるには、教育の質を転換する必要がある。何よりも、仕事への意欲を高め、やる気を引き出す教育、その実現に産業界も教育界もあげて力をかけるときではないか。

JADEC ニュース 80 号 (2010/3) より